

# 人文会ニュース

1992. 2

ちくさ日誌……………ちくさ正文館書店 古田一晴 1

〔人文書講座25〕

現代の死——欧米における老い・死・死後  
……………成瀬駒男 6

収書考——名古屋市立図書館の場合  
……………名古屋市鶴舞中央図書館 加藤三郎 18

名古屋研修旅行報告……………弘報委員会 23

63

## J. クリステヴァ／原田邦夫 訳 詩的言語の革命 全3巻

1 理論的前提 社会の中の語る主体としての人間探求。3296円 千310

## L. ストーン／北本正章 訳 家族・性・結婚の社会史

1500-1800年のイギリス 夫婦・親子関係史の決定版。5356円 千310

## 落合仁司 トマス・アキナスの言語ゲーム

ヨーロッパとは何か。〈存在の形而上学〉の社会理論。1957円 千260

## 小山静子 良妻賢母という規範

国民国家や近代家族の成立と不可分の規範として捉える。2472円 千260

\* 定価は税込 / 振替東京5-175253

東京文京 勁草書房 電話(03)  
後楽2-23 3814-6861

## 御茶の水書房

◎アメリカ黒人女性作家の作品と世界

## アメリカ

## 黒人女性作家論

アリス・ウォーカー／トニ・モリソン／グロリア・ナイラー

加藤恒彦(著)

A 5巻・320頁・定価3090円

黒人女性文学のバイタリティーと魅力の源泉はなにか。80年代アメリカ黒人女性作家論の性格をもちつつ彼女の作品に歴史的パースペクティブを与える

〒113東京都文京区本郷5-30-20 ☎03(5684)075

## 現代教養文庫

## 近きより 全5冊\*完結

正木ひろし著 敗戦まで公然とファシズムを批判しつづけた個人雑誌の全文。定価各八八〇円

天の穴、地の穴 立松和平・編  
野間宏 生命対話 定価一〇〇〇円

人間と自然の関係、現代文明など人類が直面する様々な問題をめぐって語る。対話者十四名。

わが子よ 全4冊 「日本株式会社」 批判  
鶴島光重著 440 / 520円 内橋克人・佐高信著 680円

## 社会思想社

東京都文京区本郷3・Tel.03-3813-8101

## 生の円環運動

### ●丸山圭三郎●

著者自身の「臨死体験」「ガン体験」をはじめ、脳死、安楽死、死後生などを論じ、死を想う動物=人間の核心に迫る▶1200円

## クジャクの雄はなぜ美しい?

長谷川真理子 雄が派手で美しいのは、雌が選んだから?! 動物界の永年の謎に挑戦▶1700円

## 紀伊國屋書店

出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1  
☎03(3439)0128(営業) 表示価格は税込

# ちくさ日記

ちくさ正文館書店 古田 一晴

○十一月十七日(日)

人文書、歴史書を一階文芸書売場隣りに移動後一ヶ月半経過。まだ棚ジャンルは流動的であるが、改装に伴うあと片付けはひと段落。お客様の動向の変化を観察するゆとりも出てくる。三時過ぎ、『大日本古記録 続日本紀 前篇 後篇』(吉川弘文館)を購入いただいた方がいらした。院生ふう、ジャンパーにジーンズの軽装。私が始めてお相手する方だ。以前は売場が離れていたため直接対応は希だった。一階に移した効果か、スリッパの裏

印は、六月三十日、八月三十一日、十月二十日、十一月十七日と、五月常備入れ替えから四回転。移動後すでに二回転。前期のデータでは一回転。当店の三ヶ所ある入口の中で最も利用される入口にすぐのスペースを人文書、歴史書を配置した具合か、午後長時間、棚の前で選書される方が目立つようになる。専門書は二階でもという思い込みが誤りであったと思う。

○十一月二十日(水)

終日、来客がとぎれない。

内田修先生。秋吉敏子のカーネギーホールコンサートに招待され、近々渡米といわれる。『ジャズが若かったころ』(晶文社)の著作あり。有名な「ジャズ・ドクター」。

二村利之氏。『ドストエフスキー全集』(筑摩書房)セットで購入いただく。七ツ寺共同スタジオという芝居小屋主。マルセル太郎『芸人魂』(講談社)の入荷を尋ねられる。未刊である。十二月にスタジオでマルセル氏の独演会がある由、早々目を通されたいと。

前島良雄氏。現在は河合塾に勤務されている。以前、中村真一郎氏を紹介いただいた。

内田美弥子さんと海上宏美氏。両氏は未来社、西谷雅英氏と同窓生。海上氏はフランク・ステラとキーファーの作品集を探しにいらした。あいにく、ステラ『ワーキング・スペース』(福武書店)絶版。『ステラ』(新潮社)を勧める。キーファーの日本版は出版されていない。海上氏の細君の火田詮子さんが、ブレヒトを唄うコンサートの準備をしている。火田さんは女優で、北村想『寿歌』のキョウコを演じた。ジョルジュ・ストレーラー演出のミルバのブレヒトを引き合いに話す。実はこの企画、演出家の久保則男氏を通じてうかがっていた。久保氏が火

田さんから相談をうけた。そのとき、弊社のPR誌『干艸』(現在休刊)で特集した加藤周一号にブレヒトの訳詩「子どもの十字軍」が掲載されていたことを思い出された。火田さんに参考にさせたいからと、在庫の有無を問い合わされた。この訳詩は『加藤周一著作集』(平凡社)にも収録されていない。久保氏は、かつてオフル『カルミナブラーナ』を演出された。本年原典全訳が筑摩書房より刊行された。

寺西慎文君。高校時代から利用いただいている。大のイタリア虜。数年前イタリア旅行。小瀧達郎『ヴェネツィア』(筑摩書房)をさすが見逃がさない。

○十一月三十日(土)

出張で二日店を留守にする。出社、未処理の新刊、補充の多さにただ茫然とする。とても一日で片付く量でない。区切りを付けて、昼食に出る矢先、瀬戸川猛資氏が訪ねてこられる。お茶をご一緒する。瀬戸川氏は、現在休刊にされた『BOOK MAN』(トパーズプレス)の編集兼発行人で、ミステリー評論家。年一度刊行される、双葉十三郎『ぼくの採点表IV』の営業でこられる。当店には、この企画を毎回愉しみに待ち望んでおられるファ

ンの方が多い。各巻必ず当店のベストテン上位にはいる。瀬戸川氏と話はずみ、いつとき出張疲れを忘れる。

○十二月十一日(水)

『宮崎市定全集』(岩波書店) 三回配本日。入荷数が定期数を下まわる。十一月二十五日、三回配本発注時点で、発注数は定期プラス三冊としておいた。ところが、配本日までの二週間余の間に、御予約いただいた方が、店売分の三冊を上まわって、二冊不足となる。予約出版の締切日が十二月二十日なので、直前に予約申し込みが集中した。あわてて、不足予約分と、予約締切りまでの店売分を鈴木書店に発注する。予約締切りまで、まだ二週間ある。この時点で店頭で三回配本が並んでないと、直前まで迷って決められる方を逃がしかねない。少々あせる。同ケースが、『遠山茂樹著作集』(岩波書店)でも発生。しかも締切日も同日であった。

○十二月十五日(日)

年末は常備申し込みの締切りが集中する。日曜日で入荷がないから、先ず取次店の一括申し込みを済ませる。各社の常備申し込みの書類も山積みである。みすず書房、朝日新聞社、東京創元社、新曜社などなど。未来社、

三二書房など全点選択でお願いしている販元さんまで手がまわらず、年明けに持ち越す。

未処理の新刊案内で、早急な返事を迫まられているものを抽出する。マリオ・プラーツ『官能の庭——マニエリスム・エンブレム・パロック』(ありな書房)若桑みどり他訳をすっかり忘れていた。十二月中旬刊行予定とある。八二四〇円の大著。M・プラーツは「肉体と死と悪魔」(国書刊行会)以来、七年ぶり、待望の翻訳。前回の部数を参考に発注する。今年後半は、各社大著で健闘した企画が多かった。アンリ・ジャンメル『ディオニューソス——バックス崇拜の歴史』(言叢社)、『エリアーデ世界宗教史(全三巻)』(筑摩書房)、『斎藤磯雄著作集(全四巻)』(東京創元社)、荒俣宏監修『ビュフォンの博物誌』(工作舎)、荒俣宏『世界大博物図鑑(全五巻)』(平凡社)の完結、刊行が開始されたJ・ブルクハルト『ギリシャ文化史(全五巻)』(筑摩書房)、F・ブローデル『地中海(全五分冊)』(藤原書店)、西谷啓治監修『ドイツ神秘主義叢書(全十二巻)』(創文社)など概成のジャンルに収まり切らぬ変化球だ。それに伴ない、棚構成の見直しを考えさせられる。来年の宿題とする。

○十二月二十六日(木)

年末間際の配本で、追加発注したくとも、流通上年内到着が不可能な時期にはいつている。『居酒屋の加藤周一』(かもがわ出版)、『ほくの採点表IV』(トパーズプレス)、直扱いのみであるが『量子力学の冒険』(ヒップファミリークラブ)が入荷数と売売数からして、年内在庫切れ避けられぬ。やむをえず、販元さんをお願いして、宅急便で出荷いただく。おかげで、年始までのお客様に迷惑をかけなくてすむ。

河合隼雄・鶴見俊輔『時代を読む』(潮出版社)が、年末最終便の配本に間に合う。これで年内の目玉商品はおしまい。もともと、十一月二十五日が新刊案内時の発行予定日だった。一月上旬まで流通が止まる。店在庫だけで約一〇日間の販売をしなければならない。残念なことに、年内発行予定で注文済みの重点商品で刊行が間に合わなかったものも多い。C・レヴィーストロス/D・エリボン『遠近の回想』『コレクション 瀧口修造十一』、戦前・戦中篇I』(各みすず書房)、網野善彦『海と列島の中世史』(日本エディタースクール出版部)、T・W・アドラー『本来性という隠語』(未来社)、ヴィム・ヴェ

ンダース『エモーション・ピクチャーズ』、長谷川宏編・訳『ヘーゲル哲学史講義上』(各河出書房新社)など。そのせいか、この時期にしては人文書、歴史書の賑わしさに欠ける印象をうける。

○九二年一月五日(日)

人文書、歴史書を一階に移して、まる三ヶ月が経過する。そろそろ前年対比を出さねばならない。幸い当分入荷が無い。データー整理に時間を当てる。惜しいことにレジ分類のちがいで、人文書、歴史書の合計の比較しが出せない。政治、社会も同様比較できぬが、新人文書になつてから約一割のシェア。新人文書売場の十月期一六・二％、十一月期一六・九％、十二月期一四・二％、三ヶ月トータルで一五六・九％、以前は人文書、歴史書の売れ筋の一部を文芸書にも並べていたから、この数字は割り引いて考える。次に文芸書を加算して比較すると、十月期一〇九・一％、十一月期一一七・四％、十二月期一〇五・四％、三ヶ月トータルで一〇〇・二％と出る。人文書、歴史書が二階にあったところに横這い現象が続いたことを思えば良好の結果である。

一方、二階へ移した、文庫・新書の推移を出してみる。

●新刊案内●

## 老いの (魂学) ソウロロジー

老人臨床での「たましい」の交流録  
山中康裕 著

痴呆やうつ病の老人たちにとって、そして私たち自身にとって、人間の尊厳とは何だろうか。魂のケア(ソウロロジー)を探し求めた、ふっくらと暖かな臨床報告。人生の集約点としての老いの輝きにふれる驚きと喜びを語る。

四六判上製カバー付 定価1,854円

## イメージを生きる 若者たち

メディアが映す心象風景  
藤竹 暁著

メディアに映し出された日本の社会現象、現代若者の考え方・行動形式を、鋭い感性と深い洞察力、そして透徹した論理によって平明に説き明かす。好評を博した『若者はなぜ行列がすきか』につづく現代若者学の第2弾!

四六判カバー付 定価1,648円

## モードの社会史

西洋近代服の誕生と展開  
能澤慧子 著

14世紀に誕生した人間の「第2の皮膚」=近代服は、以後19世紀まで世紀ごとに花開く。そして20世紀。人々は新たなモードの創造を求めて模索しつづける。若る人と作る人のための、興味つきない人間とモードの歴史!

(有楽園選書) 定価2,060円

## 文化人類学

村武精一・佐々木宏幹 編

周辺諸学との交流のなかで発展著しい文化人類学の最新の成果を体系化するとともに、フィールド調査の資料を豊富にとり入れながら理論と実態を総合的に解説した絶好の入門書。

(Sシリーズ) 定価1,545円

●定期購読のお得なめ

読者と著者を  
むすぶ戸誌 **書斎の窓** 1日発行

●見本誌を無料送呈いたします。『書斎の窓』  
係(03-3264-1310)までご請求下さい。年間  
購読料は500円(消費税・送料込み)です。

101東京都千代田区 有斐閣 103-3265-6911  
神田神保町2丁目17番 (定価は税込です)

文庫がキビしい。計画当初より予測していたことだ。十月期一〇・一％、十一月期七七・八％、十二月期八五・三％、三ヶ月トータルで八八・一％と出る。全ジャンル中、唯一落ち込んだ。もっとも岩波文庫、学術文庫、文芸文庫の新刊だけは一階のジャンルごとの平台上に並べようとしているから、その分を加算すれば、ほぼ一〇％ちかくなると思われる。新書への影響は意外に少なかった。十月期一一・四・三％、十一月期九八・二％、十二月期九八・六％、三ヶ月トータルで一〇三・五％と

出る。二階全体では、十月期一二・六％、十一月期九八・七％、十二月期一二・三・七％、三ヶ月トータルで一〇九・六％と伸び率は高い。コミック棚を増設したこともプラスに働く。一番の不安材料が、二階へお客様を十分案内できるかという点に集中していただけに、まずまずの結果。  
今回改装した売場全体では、十月期一二・三・九％、十一月期一二・二％、十二月一〇七・二％、三ヶ月トータルで一〇・八％となる。

# 現代の死——欧米における若い・死・死後

成瀬 駒男

(1) 老人の抬頭とそれ以後

現在老いと死に関する議論がかまびすしいが、筆者の印象では、前者の論は扶養コストという社会的な面、後者の論は脳死と臓器移植という倫理的・技術的な面にのみ圧倒的な比重がかけられている風に見えてならない。が、たとえば生前に〈本人〉が臓器摘出を承諾しても、遺族が身体を切り刻むことに対して拒否反応を示し、結局移植が行なわれないといったケースが多いことは、その民族の身体観や靈魂観という文化的な面が事実上決定

権をにぎっていることを示してはいないか。〈本人〉といっても、その自我は家族共同体から絶縁・屹立してはおらず、それゆえに遺族は本人の気持ちを感じとったと確信できた。不幸な死に方をした身内の霊に向かって、「お前、さぞかし無念だったろう」という風に相手を感じたであろう感情を自分に注入して、それを反芻することができたのだ。それゆえ、議論をさらに前進させるためには、我が国の老いと死を他の国のそれらと照らし合わせ、その独自の面と共通した面をもっとよく知る必要が

あろうかと思われる。以上の観点から主として欧米の場合を取り上げてみたい。

現代の問題に入る前に、過去の社会は老人をどう扱っていたか見ておこう。アリエスとある対談の中でN・B・ラピエールは、高度な工業化によって人口が極端な形で都市へ集中したことや家族的な連帯が解消傾向にあることとあいまって老人の地盤沈下が急速に進行していることを指摘した後に、それ以前の老人は黄金時代にあったと言う人もいるが、どう思うかと質問している。

それに対してアリエスは、レンブラントの絵画の中に見られる本を読む古い衣裳を着込んだ老人の重々しい表現と、社会内での老人の実際の役割とを混同する危険を指摘しつつ、そうした説を否定し、西欧の過酷な生活の中で老人とは、十八世紀までは「一般人の生活がもはや送れなくなった人」であり、良く言ってもせいぜい流行おくれの服を着、本を読む「引退した人」であり、悪くいえば齒が欠け、悪臭すら発する嫌われ者であったと言、また世襲財産の保有者たる彼と相続人との関係は今日よりもはるかに緊張しており、前者の死になにか合点がゆかないことでもあれば、当局はまずもって後者に疑

惑の目を向けた、と言う。老人の価値が低かった時代には子供の価値も低かった。が、十八世紀にはいると核家族に基礎を置く新しい態度と感性が現われ、子供が宝、王様として見直され、と同時にヴォルテールをはじめ有能な老人の方も社会構造の複雑化にともない、その経験や知恵や組織力を買われて社会の檜舞台により長く留まるようになり、しだいに長老として尊敬的になり、こうしてアリエスが解明した〈子供の誕生〉と踵を接するように、老人の地位の向上が起こったと言う。この傾向は二十世紀初頭まで続いた様子で、銀婚式、金婚式はおそらく十九世紀に生まれたそうした傾向の名残りであろう。黄金時代はオーバーな表現だが、過去に比してより良き時代ではあったろう。老人と子供との関係については一月一日子供が別に住む祖父母のところに挨拶に行き、お年玉をもらい、その長寿を祝うという図柄がよく当時の版画に出てくる。要するに当時、祖父母と孫との交流が現実には珍しくないほど老人は前より長命になったということだ。これは家の連続性に関する興味深い現象である。それはまたヘミングウェイの『老人と海』での老人と子供の交流という形にもあらわれる。老人観と子

供観は社会現象の中では同調して変化するものらしい。さて、今日の詩人は〈老年〉をどう歌ったか。サン＝ジョーン・ペルスの詩集から引用しよう。

いまやわれらは到着した、老年よ。

この意義深い時と邂逅する約束は、結ばれてすでに久しい。

日が暮れ、われらは帰港する、外海での漁獲とともに。

何もない、人の足音の響く家族の敷石も都市のすまいも、

響きのいい空の下の、石のバラを敷いた内庭も。

さあ、いま焼こう、藻で覆われた老船を燃やそう。

南十字星が税関の上にかかり、鷺軍艦鳥が島に戻った。

……

自尊の後には名誉がやってくる。そして大いなる青

い剣の中には

潑刺たる魂の輝光。

これはノーベル賞受賞の年の一九六〇年に七三歳の詩人が発表した『時の流れ』という詩集の中の一節である。そこには老人の前に広がる茫漠たる光景、沈黙に満ちた広大で捉え処のない時空と同時に、稲妻の中で一瞬捉えられた老年の誇りが歌われている。

さて日常生活に話を戻すなら、老人の問題はかつては各家庭内部の私的な枠内にとどまっていた。ところで第一次大戦後、主として欧米で、その老人がとくに社会問題の面から再び地盤沈下に見まわれ、第二次大戦後には老人問題が先進工業国で社会政策全体をひっぱり上げるような形で問題化してくる。すなわち、この威厳のあった長老に対する態度に変化が生じ、以後彼らは保護を要する弱者として扱われるようになる。今日、フランスでは老人を指すのに老いた人グレイヤールに代わって、第三年齢者トロワエム・アージュなる語が使われる。が、老人はそうした気づかいとは裏腹に、日新月歩の先端技術と情報理論の支配する社会の中では、現役の地位上昇のために、相対的な地盤沈下に直面せざるをえない。また医学の進歩や抗生物質の開発や予防接種による死亡率の低下のために、老人人口が急増し、その老後の生活をめぐって諸問題が噴出していることはど

こも同じである。ところでフランスで今日の生活態度の形成に大きな力を及ぼしたのは、すでに方向づけられていた五月革命（一九六八年）の世代ではなく、一九二〇年前後に生れた世代であった、とアリエスは言う。その暮らし方の特徴は、多少の誇張をまじえるなら、老人を眼中に入れないこと、子供を作らないこと、死が存在しないかのように振る舞うことの三つに集約される。子供の数が減り、老若の比率が変化する。フランスの一九八五年における人口統計によると、総人口約五五〇〇万中、二〇歳以下が一六〇〇万（二九％）、二〇～六四歳が三二〇〇万（五八％）、六五歳以上が七〇〇万（一二・八％）であり、高齢化の指数二二・八％はわが国の一〇・六％（一九八七年）より高い。しかもフランスでは一九八七年には一三・三％に上昇している。それでいながら日本におけるようなかまびすしい高齢化社会危機論はあまり聞かえてこない。高齢者の消費活動——健康維持、療養、レジャー、文化の享受——には社会を大いに活性化する力があるというのに、この点がわが国では過小評価されているように思える。

## (2) 死の隠蔽

以前は臨死者が家族や知人に別れを言う公開的で儀式的なものであった死が、現代では一般的には隠蔽されるようになってきている。その原因には家族感情の変化と家族による愛情の独占ということもあるだろう。が、アメリカの社会学者グレースーとシュトラウスはカリフォルニアの六つの病院での調査を通して、事実を知らされた場合の臨死患者のあまりにも強い発作的な取り乱しから病院の日常業務を守る目的で、医療スタッフが死の間近さを隠蔽する、その過程を研究した。患者と家族の絶望や愁嘆場は、予期せぬ事態を正常な業務の中に持ち込む厄介な出来事であり、医師や看護婦がそれにまきこまれて苦痛や罪責感を持たず、プログラム化された医療業務全体の円滑な運営に支障が生じてしまう。そうした訳で医療側は自分が沈黙することにより患者の沈黙と協力を求め、患者側は、自分の死——知らされなくても知っている場合が多く、ダフらの調査では四分の三が気づき、与えられた情報は信用していないという——を否認するという共同作業の中での自分の役割を果たさねばならない。患者は死と公然と向き合うのを恐れて、医師

に協力する。こうして死は、かつての劇的性質を失い、ルーチン化を余儀なくされる。病院にとつては、隠し易く処理し易い静かな死こそ理想的なものである。一九六一年アメリカでの二〇〇人の医師を対象にしたアンケートでは、癌患者に病名を告げることには九割が反対し、フランスでも一九六八年のアンケートでは全員が絶対反対した、という。ダフらはアメリカの病院で研究中に、四〇例の死亡を観察した。癌の最初の徴候から死まで平均二九か月が経過したが、四分の三例においては患者は何も知らされなかったという。しかし、どの臨死患者も同じ扱いを受けるとは限らない。一般人の場合と、社会的地位も教育水準も高い患者の場合とはまた別である。ダフらの調査では、生前に事業等に関して手を打つ必要のある人だと医師側が察した人には告知することが多いという。ほとんど治癒が期待できない〈医学的価値〉の高い患者の場合も、医師は親友に対するような雰囲気の中で治療や検査をやり、患者に全面的に知らせることが多く、またそうした患者に限り苦悩や悲嘆を露わにしても許容される、という。グレーサーらが観察したもう一つのものに〈死の弾道〉というのがある。死を病院の平

常業務の中に組み込めるものにするには時間の調整がとくに大切になる、という。つまり病院の活動のリズムと死のタイミングとをうまくすり合わせねばならない。グレーサーは病院には緩急や予測によって異なる何種類かの〈死の弾道〉（射程の短い白砲、中間の榴弾砲、長いカノン砲の弾道）が用意されており、それぞれの医療はその一つに合わせて行なわれる、と言う。事が大過なく弾道に沿って運ばば、病院の調和した環境は乱されない。こうして病院での死の時は日常業務の状況の中で社会化するわけだが、もっとも時折、生物死が予定通りに起こらず、死が延期される場合が生じたりする。すると医療スタッフも家族も当惑し、欲求不満を起こす、という。また、すこし意味合いの違う隠蔽された〈社会死〉の場合をサドナウが研究している。それは仮死状態で運びこまれた急患の場合であるが、その患者の社会的性格——一方はアル中、麻薬中毒者、売春婦、一方はサラリーマン——によって、扱いに違いが生じうるといふ。驚くべきことだが、生者として蘇生術を施されるか、〈到着時死亡者〉として扱われるかは、その人の社会の中での位置によってある程度決まる、とサドナウは言う。

### (3) 死の禁忌

アメリカのある部分は別にして、末期患者への態度の特徴は死を隠蔽することである。それと平行して死の禁忌という態度がある。それは患者の死後、家族が友人にも近所の人にも、つとめて喪の悲しみを表面に出さないようにし、出来るだけ控え目に死を通過させてしまおうとする態度を指す。また転じて周囲が遺族らの激しい感情の噴出を忌み、それを御法度とする態度をも指す。社会はもはや遺体や、死者を悼んで泣く遺族の姿を見ることに耐えられなくなったのだ。人生は常に幸福なものであるか、そうしたものに見えるかであらねばならない。この傾向を最初に発見したのはアメリカの社会学者ゾラーである。彼は一九五五年の先駆的な論文「死のポルノグラフィ」の中で、高度工業化社会にあっては死が性欲に替わって主要な禁忌となっており、喪の悲しみを人前で表明する人間は病的で弱い性格の持ち主だと見なされていると指摘し、そうした社会の抑圧性こそ今日の社会病理の原因の一端をなすものと断じた。心痛と禁忌に挟まれたこの心理状態は、後にゾラー自身が体験している。一九六一年兄を失った彼がカクテルパーティーの

誘いに、今喪に服しているから出られないと言ったところ、相手は「何か非礼でふらちな言葉でも吐き掛けたとでもいった風に」まごまごしたという。この社会学者は、親しい人の死は確かに激しい心痛をおこすが、人がその癒着を遅らせるようなことをしなければ、自然と治ると言い、フロイトが性の禁忌を破ったその戦術を借りて死の禁忌を破ろうとしたわけだが、フロイトが社会に受け入れられたのとは反対にこの学者たちの意見は無視されたのだ。苦しみや悲しみをぶちまけられると、相手は憐れみの感情どころか、嫌悪の情を抱くようになる。それは幸福という最も今日的な感情に背く罪を犯すものだから。

ところが主としてアメリカで一九六四年と一九六九年の間に死の意識が大変化が生じたと言われている。一九六五年アリエスがその国のある名編集長に自分は今死の研究をしていると語ったところ、それまで同じ話に全然食指を動かさなかったその女史が「それ、アメリカ人にすぐ受けちゃうわよ」と叫んだという。この期間にますます多数のアメリカの社会学者と心理学者が病院での死を中心にして論文を書いており、これと正比例してア

アメリカの病院においては死の禁忌は弱まりつつある。

#### (4) 新しい質の死

少なくともアメリカでは、最近告知のケースが増えてきている。中世期には、死期が近いことに気付かぬ人には聴罪司祭が死の告知人<sup>メソキラス・モルタイス</sup>となつて相手にそれを知らせた。現代ではそれは医師の役目となり、彼の口から末期癌の患者にはより良い時を過ごし、より良い死を迎えてもらうという意図のもとに率直に病名が伝えられることが増えた。確かにこれは患者サイドが告知されないことによつて不利益を蒙つたとして病院側を告訴するケースが増えてきたことが直接の原因ではあるけれど。キューブラー・ロスの著作には、告知をうけて自分の間近い死に立ち向かう末期患者と周囲の人たちの多くの例が書かれている。その際末期疾患の告知はストレートな形では本人の頭にはいらず、しばらくの間ほぼ全員が「私は違う」という反応を示す、という。が、これは痛ましい事態への健康な対処法であるとしている。次の段階で患者は気難しくなり他人へ怒りを爆発させる。その後すこし延命してもらうために神に教会への協力を約束したりす

る「取り引き」の段階がくる。つぎに患者はこの世と訣別する準備期間である抑鬱状態にはいる。この諸段階を経て、これまたほぼ全員が部分的ないしは全面的な死の受容に落ち着くという。その際、本人が時間をさかのぼる形で青春期、幼児期を回想したり、また治つたら昔よく行つたどこそこで、何を食べてみたいという希望を洩らすようになると、受容がうまく行つたと、家族も安堵すると言う。このキューブラー・ロスの描く名高い五段階過程には、自分の場合は当てはまらないといった日本の医療者側からの体験談も公にされており、他に日本人の心性に合った受容の諸段階があるのかもしれない。

#### (5) 死の権利

今後大きな問題になつてきそうなのは、末期患者がどの場所どの時点で、尊厳を保つたまま人生を終えるのが望ましいかという問題だろう。過剰延命の放棄と安らかな死が求められるのは末期癌患者の場合だけではない。家族の介護もそう期待できぬ中で不治の慢性疾患のために、食事も用便もままならない状態で長期療養を強いられる老人の状況も似たものだ。場合によっては無益で屈

辱的な過剰医療を患者側が拒否しても決して非難されはしないし、むしろその権利ありとする声も多いと思われる。患者の意識が自立的になり、周囲も死への意志を受けとめることが出来るなら、本人が現代の受身的な立場を脱して、伝統的社会におけるように家族、親友に来てもらい、御礼やお詫びを言い、最後は延命装置を取りはずさせ、麻酔の助けを借りつつもなんとか自分の死を主催しながら往生するという状況もあって然るべきではないか。この問題で参考になるのは、一九六二年名古屋高裁が示した安楽死を是認しうる場合の六要件である。

一、病者が現代医学の知識と技術からみて不治の病に冒され、しかもその死が目前に迫っていること。二、病者の苦痛が甚しく、何人も真にこれを見るに忍びない程度のものなること。三、もっぱら病者の死苦の緩和の目的でなされること。四、病者の意識がなお明瞭であって、意志を表明できる場合には、本人の真摯な囑託又は承諾のあること。五、医師の手によることを本則にし、これにより得ない場合には、医師により得ない首肯するに足る特別の事情があること。六、その方法が倫理的にも妥当なものとして認容し得るものなること。このうち一見

して第五の要件をクリアすることが最も難しそうである。であるなら、ソーンダーズの方式を研究すべきではなからうか。ロンドン大学の医療機関に所属していたソーンダーズ女史が末期癌患者のために開発したヘロインの微量(四時間おきに五〜一〇ミリグラム)経口投与方法は、中毒のおそれがないとされ、事実聖クリストファーズ・ホスピスで実施され、大いに注目を集めた。行き過ぎた延命は放棄し、安らかな死を迎えてもらうのが女史の試みの眼目であった。ここは当初は充実した機能の病院と、快適な自宅との中間的存在であった。予後三か月以内と診断されて入院を許可された患者の七〇%が六〇歳以上であり、その大半が苦痛の少ない状態で、診断通りに臨終を迎えるという。ヘロイン使用禁止国であるわが国では、別途に麻薬中毒にはならない麻酔方法が開発される必要があるが、いずれにせよ実現のめどのつかない安楽死に代わる有力な対処法ではある。

#### (6) 死後

現代の西欧人は死と死後のことをどう考えているのか。フランス調査研究協会が一九六八〜一九六九年に死

を思うときの精神状態に関して行なった意識調査では、  
〈恐怖、苦惱〉が四六％、〈反発、怒り〉が一〇％、〈静かな待機〉が四三％であった。それが一九七八年の「あなたはどんな死を望むか」の質問には「急死」が七七％、「死を見守る」が一〇％、無回答一〇％の回答を得たという。つまり、現代人は「あの人は死ぬことに気づかずに逝きました」という紋切り型の口上に示される、意識のない死を望んでいたのだ。またシヨニューによれば、一九五八年フランス世論研究所が一八〜三〇歳の一五二五人を対象に「死後には何かが生き残るか、それとも一切が終るか」というアンケートをしたところ、「何かが生き残る」が五五％（男性四六％、女性六四％）、「一切が終る」が二三％（男性三〇％、女性一五％）であった。一九六四年末にほぼ同じ年齢層を対象に「死後、今私たちが見、触れている世界とは別の世界があると、あなたは思いますか」というアンケートが行なわれたが、その結果は「あると思う」が五七％、「思わない」が二七％、他が無回答だった。つまりこの時点までは若者の五五〜六〇％はまだキリスト教的死生観を持っていた。ところが一九七〇年に異変が生じた。この年、さまざまの年齢層（二〇〜三

四、四九、六四歳以上）にわたって、「あなたは死後の生があると思えますか」のアンケートが行なわれたが、〈あると思う〉が三七％、〈あるとは思わない〉が四七％、無回答一六％、性別では男子二九％・五五％・一六％、女子四四％・三九％・一七％という結果が出た。この五年間に西欧の中核たるフランスで、来世への希望が著しく失われてしまったのである。一九七四年末、一五、二九、四九歳とそれ以上の年齢層を対象に「あなたは死後の生があると思えますか」のアンケートが行なわれたが、〈思う〉が三九％、〈思わない〉が四八％、無回答が一三％であった。シヨニューはこうした結果を第二バチカン会議（一九六二〜六五年）の改革をはさむ時期に伝統や永遠の生等について教会人の言葉数が少なくなったことと関連づけている。教会がこんな風だから西欧人は来世への希望を失ってしまったのだ。死への準備一つとっても異教徒の方がよほどきっちりやっていると。西欧人の約半数が四、五年の間に死に関連する伝統的な知を失ったことに宗教人は一様にショックを受けた模様である。

## 関連文献リスト

### ■老いと死

思想の科学研究会〈老いの会〉編『老いの万華鏡』(御茶の水書房)

朝長正徳『脳の老化とぼけ』(紀伊国屋書店)

猪股満子『老いととの対話 死との対話』(社会思想社)

J・ホワイト『死と友になる』(春秋社)

日野原重明『老いと死の受容』(春秋社)

田辺順一『老い』(平凡社)

N・エリアス/中居実訳『死にゆく者の孤独』(法政大学出版局)

『堀一郎著作集6 生と死』(未来社)

S・ド・ボーヴォワール/朝吹三吉訳『老い』(人文書院)

浜田晋『老いを生きる意味』(岩波書店)

### ■死の歴史・民族学・神話学

アリエス/伊藤・成瀬訳『死と歴史』(みすず書房)

アリエス/成瀬駒男訳『死を前にした人間』(みすず書房)

アリエス/福井憲彦訳『図説 死の文化史』(日本エディタースクール出版部)

エリアーデ/堀一郎訳『永遠回帰の神話』(未来社)

ハンティントン、メトカーフ/池上・川村訳『死の儀礼』(未来社)

ホイジンガ/堀越孝一訳『中世の秋』(中央公論社)

M・ボナバルト/佐々木孝次訳『クロノス・エロス・タナトス』(せりか書房)

鯖田豊之『生きる権利・死ぬ権利』(新潮社)

### ■現代の死

J・クルードソン/小野克彦訳『エイズ疑惑』(紀伊国屋書店)

吉本隆明・竹田青嗣他『人間と死』(春秋社)

R・キャンベル『人はふさわしい死を死ぬ』(晶文社)

E・ヒレスム『生きることを意味を求めて』(晶文社)

P・ツヴァイク『性と死の記憶』(晶文社)

J・マクマナズ/小西嘉幸訳『死と啓蒙』(平凡社)

A・ベッカー/今防人訳『死の拒絶』(平凡社)

E・モラン/古田幸男訳『人間と死』(法政大学出版局)

ソクタグ/富山太佳夫訳『エイズとその隠喩』(みすず書房)

河上倫逸『巨人の肩の上で』(未来社)

### ■心理学・精神医学

吉福伸逸『生老病死の心理学』(春秋社)

近藤裕『自分の死』入門』(春秋社)

E・S・シュナイドマン/白井徳満・白井幸子訳『死にゆく時』(誠信書房)

多田・河合編著『生と死の様式』(誠信書房)

河野博臣『生と死の心理』(創元社)

樋口和彦・平山正実『生と死の教育』(創元社)

糸魚川・日高編『応用心理学講座12 生命科学と心理学』(福村出版)

中川・宗像編『応用心理学講座13 医療・健康心理学』(福村出版)

C・G・ユング他/河合俊雄他訳『時の現象学 II』(平凡社)

笠原嘉編『ユキの日記』(みすず書房)

V・ジャンケレヴィッチ/中沢紀雄訳『死』(みすず書房)

デュルケーム/宮島喬訳『自殺論』(中央公論社)

吉本隆明『死の位相学』(潮出版)

#### ■ 日常の生と死

曾野・デーケン編『生と死を考える』(春秋社)

平山・デーケン編『身近な死の経験に学ぶ』(春秋社)

飯塚・デーケン編『日本のホスピスと週末期医療』(春秋社)

加藤恭子『伴侶の死』(春秋社)

平山正実『死生学とはなにか』(日本評論社)

木村利人『いのちを考える』(日本評論社)

大村英昭『死ねない時代』(有斐閣)

#### ■ 死と医療

水野肇『脳死と臓器移植』(紀伊国屋書店)

E・S・カラーリ『おだやかな死』(春秋社)

R・セルツァー『からだの宇宙誌』(春秋社)

池見・永田編『死の臨床学』(誠信書房)

池見・永田編『日本のターミナル・ケア』(誠信書房)

東京大学医学部『ちくまライブラリー53 日本の脳死』(筑摩書房)

石山豆夫『ちくまライブラリー63 法医学への招待』(筑摩書房)

立川昭二『この生この死』(筑摩書房)

NHK『ガン告知』(筑摩書房)

宮川俊行『安楽死の論理と倫理』(東京大学出版会)

H・プロディ/館野・榎本訳『医の倫理 原書第2版』(東京大学出版会)

吉利和編『医師の生命観』(日本評論社)

唄孝一『脳死を学ぶ』(日本評論社)

福岡誠之『脳死を考える』(日本評論社)

M・ダーウィ/平沢正夫訳『ドキュメント 臓器移植』(平凡社)

矢貫隆『救えたはずの生命』(平凡社)

新村拓『死と病と看護の社会史』(法政大学出版局)

中川米造『医とからだの文化史』(法政大学出版局)

サルダ/森岡恭彦訳『生きる権利と死ぬ権利』(みすず書房)

加藤尚武『バイオエシックスとは何か』(未来社)

E・キューブラー・ロス/川口正吉訳『死ぬ瞬間』(読売新聞社)

E・キューブラー・ロス/川口正吉訳 続『死ぬ瞬間』(読売新聞社)

I・イリッチ/金子嗣郎訳『脱病院化社会』(晶文社)

立花隆『脳死』（中央公論社）

米本昌平『先端医療革命』（中央公論社）

亀山美和子『死にゆく人々に教えられて』（人文書院）

■その他

J・グリーン編／刈田・植松訳『最期のことば』（社会思想社）

ヴィーゼル『死者の歌』（晶文社）

布施豊正『死の横顔』（誠信書房）

J・ヒルマン／樋口・武田訳『自殺と創造』（創元社）

R・ゴードン『死と創造』（創元社）

中村真一郎『死を考える』（筑摩書房）

稲村博『自殺学』（東京大学出版会）

家城久子『したたかに愛燃えて』（平凡社）

J・アメリー／大河内了義訳『自らに手をくだし』（法政大学出版局）

版局）

ボッカチオ／野上素一訳『デカメロン』（岩波書店）

トルストイ／中村白葉訳『三つの死』（河出書房新社）

トルストイ／中村白葉訳『イワン・イリイチの死』（河出書房新社）

社）

ソルジェニーツィン／小笠原豊樹訳『ガン病棟』（新潮社）

G・パタイユ伊藤守男訳『死者』（二見書房）

有永弘人訳『ロランの歌』（岩波書店）

モンテーニュ／原二郎訳『エッセー』（岩波書店）

成瀬駒男（なるせ・こまお）

一九三二年横浜に生まれる。東京大学文学部仏文科卒業。修士。國學院大学教授。著書『ルネサンスの謝肉祭』（小沢書店）、訳書『D・アリエス『死を前にした人間』『死と歴史』『日曜歴史家』（以上みすず書房）、E・ドールズ『パロック論』（筑摩書房）、N・Z・デーヴィス『マルタン・ゲールの帰還』『愚者の王国、異端の都市』『古文書の中のフィクション』、A・ドービニエ『児ちに語る自伝』（以上平凡社）ほか。

「人文会／歴史書懇話会」ブックリスト「一九九一」発行  
人文会、歴史書懇話会では一九九一年に会員三二社が  
刊行した新刊図書全点を収録した合同目録を、三月一  
〇日に発行いたします。同目録では図書館のコン  
ピュータ化にお応えできるようJLA、NPL、  
OPLの各マークとISBNコードを記載するほか、  
受賞図書情報なども網羅いたします。  
特約店・準特約店さんには、一部お送りさせていただきます。  
きます。

# 収書考——名古屋市立図書館の場合

名古屋市鶴舞中央図書館 加藤 三郎

## はじめに

二三二万七四一六冊——この数字は、名古屋市立図書館十五館と自動車図書館四館分の蔵書総冊数（平成三年十一月現在）である。

人口二二六方に近い名古屋市には、昭和区にある鶴舞中央図書館を中核として、中区を除く各行政区に十四分館が設置されている。館名は、中央図書館以外所在する区名が用いられている。西・南・中川・名東の四館には

自動車図書館が付設されており、分館とは別個の蔵書を持っている。したがって本市立図書館の蔵書の内訳は、建物館十五館、自動車図書館四館とあわせて十九館ということになる。

鶴舞中央図書館の歴史は古い。大正十二年十月、市立名古屋図書館として開館し、平成五年には開館七十年を迎える。開館以来六十八年の長い年月にわたり、収集・蓄積されてきた蔵書は六十九万余冊を数え、歴史の古さと蔵書の内容においても愛知県内はもとより東海地方で

も有数の図書館である。その蔵書数は、本市立図書館の蔵書の約三十%を占めている。

分館の蔵書数は、開館が古い鶴舞中央・西・熱田の三館を除き十萬冊前後であり、自動車図書館は四〜五萬冊を所蔵している。

### 図書 の 集 中 整 理

本市立図書館では、図書を収集することを「収書」と呼んでいる。一般には「集書」と呼ばれているが、この名称が用いられるようになったのは、昭和三十九年四月中央図書館制を敷き、同館に整理課を設け、収書・整理の二係を置いた時からである。それまで三館（鶴舞・栄・熱田）が独自に購入・整理していた図書を中央図書館で一括整理を行うことになったのである。

集中整理は、図書の購入選択から始まる。毎週一回、各館から司書が中央図書館に集まり、書店持込みの見計り図書（一回平均約六百余冊、さらに寄贈図書・独自発注図書が交互に加わる）をもとに自館の購入図書を選択し、さらに全館の購入図書の調整を行っている。年間通しての購入率は見計り図書の約六十四%であるが、これ

までに購入漏れの図書も相当数あったため、平成三年四月からは「選択調整予備会議」を設けて、選択漏れの図書について購入の可否を検討することになった。このための予算も確保している。

請求記号は、全館同一としており、目録カードも中央図書館で全館分を作成し、各館に配布している。受入図書については、データをコンピュータ（現在、中央図書館のみで稼動）に入力し、検索を可能にしている。中央図書館では、図書のほか雑誌・視聴覚資料（紙芝居・カセット・テープ・CD・レコード）もデータ入力を行っている。同館には、総合目録（書名・著者名・書架）があり、館同士の相互貸借に大きな効果を発揮している。各館で選択された図書は、三日後に指定書店から納入される。未納本もあるため、毎回一〇〇%の納入率とはいえないが、取次・書店の協力により良好な納入率を維持している。図書納入日には、中央図書館で作成した請求記号一覧表が届くため、受入・装備ののち早いところでは翌日に「新着図書コーナー」に配架され、市民に利用されている。

## 資料の収集方針

購入図書を選択は、週単位で行われており、平成三年度は四十五回である。限られた図書費の中での購入であるため、各館ではいろいろと工夫をし、知恵をしばっている。雑誌の購入費も図書費に含まれている。

本市立図書館では、資料の収集と保存について基本的な考え方をまとめた「名古屋市図書館資料収集方針」を定め、昭和六十三年十月一日から施行している。この方針は、昭和四十四年四月一日から施行されていた「購入の原則」をもとにして作成されたもので、図書の収集のみならず保存についても規定し、新聞・雑誌の保存についても定められている。

資料の収集にあたって中央図書館は、その機能と役割を果たすとともに、分館で応じきれない市民の多様な資料要求にも応えられるような収集を行い、市民の学習生活において求められる教養、趣味、娯楽、読み物、児童図書などの収集と人文科学・社会科学・自然科学・文学・郷土資料等各部門にわたる概説書、専門書、参考図

書等の調査研究資料や基本的資料を収集している。

分館十四館は、それぞれの設置区の地域的社会的特性を十分認識しながら、広く市民に対して図書館サービスを行うため、教養の向上、レクリエーション及び日常生活に役立つ資料のほか、地域の資料や調査研究のための基礎的、入門的な参考資料も収集している。

自動車図書館においても、分館と同様であるが、幅広い利用者層を対象にしているため、巡回する各駐車場地区の地域的狀況、利用する市民の読書傾向、読書要求等をも十分把握して効率的に収集している。

## 資料収集の実際

本市立図書館全館の蔵書構成(平成二年度末)をみると、①文学(二六・四%) ②児童図書(二二・四%) ③社会科学(一一・三%) ④工業・工学(七・七%) ⑤芸術(六・二%) ー以下略ーという順になる。

専門書・参考図書等を中心に収集している中央図書館の調査・研究のフロア(二階部分)の受入状況(平成二年度)は、社会科学(二二・〇%)、文学(一九・二%)、芸術(一一・八%)、歴史・地理(一〇・六%)、哲学・

宗教(五・三%)である。全館の受入状況は、文学(四八・〇%)、児童図書(二八・二%)、社会科学(一一・八%)、芸術(七・〇%)、歴史・地理(六・二%)という順になっている。

本市のように早くから図書館システムを形成し、集中整理を行っているところでは、資料の収集状況についても具体的かつ明確に把握することが出来る。

近年のベストセラーについてみると、『化身』(渡辺淳一・昭和六一年)最高購入冊数一四冊(BM館)・九冊(分館)、『サラダ記念日』(俵万智・昭和六二年)同九冊(BM)、五冊(分)、『ノルウェイの森』(村上春樹・昭和六三年)同 一四冊(BM)、一冊(分)、『TUGUMI』(吉本ばなな・平成元年)同 三冊(分)、二冊(BM)、『愛される理由』(二谷友里恵・平成二年)同 八冊(BM)、六冊(分)という状況である。複本の購入にあたっては、各館の判断に依っている。年末になると、恒例ともなっているその年の出版図書の「収穫」が日刊新聞の読書面や書評新聞等で特集される。この時期には、こうして紹介された図書のリクエストも図書館に寄せられるため、目が離せない。

『週刊読書人』(第一九一三号)で特集された「一九九一年の収穫」をもとに、本市立図書館での購入・利用状況(平成三年十二月十四日現在)を紹介してみたい。利用回数は、中央図書館分(コンピュータによる)のものであり、紙数の割合で諸氏があげられた最初の図書とし、訳者名・出版社名は省略した。①『不妊—いま何が行なわれているか』(レナーテ・クライン編)5(館)・11(回)②『メディアの世紀—アメリカ神話の創造者たち』(浜野保樹)1・1③『核燃料サイクル施設批判』(高木仁三郎)5・0④『日本の歴史をよみなおす』(網野善彦)15・12⑤『真理と解釈』(ドナルド・デイヴィッドソン)1・0⑥『私の中国捕虜体験』(駒田信二)15・2⑦『地中海I』(F・ブローデル)未購入⑧『再生産』(P・ブルデュー、J・Cパスロン)1・1⑨『ゼロの記号論』(フライアン・ロトマン)1・0⑩『在日外国人』(田中宏)15・4⑪『映画に目が眩んで』(蓮實重彦)未購入⑫『ウッドストック』(ジョエル・マコーワー)1(分館)⑬『内縁婚の現状と課題』(武井正臣)1・1⑭『家政学の間違い』(L・シャピロ)3・5⑮『立原正秋』(高井有一)未購入⑯『真実の瞬間』(ヤン・カールソン)未購

入⑩『東南アジアと日本』(矢野暢編) 1・6 (講座・東南アジア学)を購入) ⑪『ナナーマネ・女・欲望の時代』(ヴェルナー・ホフマン) 2 (分館) ⑫『世界大博物図鑑』(荒俣宏) 4・禁帯出⑬『城館の人』(堀田善衛)未購入⑭『郡司正勝刪定集』1・4 (第一巻) ⑮『ハーレム・ヴェールに隠された世界』(アレヴ・リトル・クルーティエ)未購入⑯『鎌田慧の記録』14・7 (第一巻) ⑰『日本の経済思想』(テッサ・モリス・スズキ)未購入⑱『啼鳴四季』(渋沢孝輔)未購入⑲『花顔の人―花柳章太郎伝』(大笹吉雄) 6 (分館) ⑳『サイボーグ・フェミニズム』(巽孝之編) 1・2 ㉑『絵本はアートーひらかれた絵本論をめざして』(中川素子) 11・1 ㉒『夏のこともたち』(川島誠) 10・9 ㉓『奏迷宮』(司修) 8・1 ㉔『誘惑するオブジェ』(宇波彰) 1 (分館) ㉕『市場・道徳・秩序』(坂本多加雄) 1・0 ㉖『ウイリアム・ブレイク／ロバート・ブラウニング』(G・K・チェスタトン)未購入⑳『20世紀の人間たち』(アウグスト・ザンダー)未購入㉘『シュレーバー回想録』(ダーニエール・パウル・シュレーバー) 2・0 ㉙『そんなバカな!』(竹内久美子) 15・3 ㉚『ヤマタイカ』(星野之宣)未購入㉛『村か

らのホンネ』(山下惣一) 4 (分館) という結果が出た。専門家・読書家三十八氏のもので、未購入(未納品)が十一冊あり、所蔵率は七十一%である。

この数字は、部分的にとらえたものであり、全冊となると状況は違ってくるが、本市立図書館の実状をご紹介した。この中には、見計り図書として納入が遅れているものもある。本市立図書館でも新刊本を即座に入手にくい著名出版社がいくつかある。いずれも話題性のある本を出版しているところである。もちろん、全点購入というようなシステムにのれば別であるが、本市の場合、複本購入は大いに期待出来ると思う。

図書館では、新しい本を一日でも早く、市民に提供したいと常々願っているところである。とりわけ、公共図書館で所蔵する本は、多くの人々の目にふれ、長年にわたり利用されており、本の生命は非常に長いのである。本市立図書館では、受入れた図書一冊は保存指定図書となり、中央図書館に永久保存されることになっている。その効果はきわめて大きい。今後とも出版文化継承の役割をもつ図書館に格別のご協力をお願いいたします。

# 名古屋研修旅行報告

弘報委員会

今回の人文会研修旅行は、小雨降る名古屋駅からスタート致しました。名古屋地区には人文会として久しぶりにお訪ね

することにりました。研修旅行の目的は、書店様の棚を拝見して、お店の方と親しく意見交換する事により人文書販売の協力体制を堅固にして行くことです。訪問させて頂いた書店様には、ご多忙のところを見学、研修会にご協力いただきまして御礼申し上げます。

今回は、日本出版販売の橋配本センター長、トーハンの風間書籍仕入課長、鈴木書店の大谷第二販売課長にご同行い

ただき、総勢三三名で十月一日出発致しました。

日程は次の通りです

(十月一日)

杖中三洋堂書店、三省堂書店名古屋店、ウニタ書房、近鉄星野書店、池下三洋堂、バルコブックセンター名古屋店、東片端正文館

(十月二日)

トーハン名古屋支店、日販名古屋支社、ちくさ正文館書店、名古屋大学図書館、名古屋大学生協南部書籍店

(十月三日)

名古屋市鶴舞中央図書館、丸善名古屋支店

東京駅に集合したのが午前七時、眠い目をこすりながら全員が勢揃い。新幹線の車中では各所でさながら研修会のように口角泡を飛ばしての話し合いを行い、あっと言う間に名古屋駅に到着しました。最初にお訪ねしたのは今度中部地区最大の坪数で新規開店されました三洋堂書店本店様。大型書店として期待しております。まだ開店まで五十日前でしたが、加藤副社長様を先頭に開店準備のお

忙しいなかを研修会にご協力頂きました。

午後からは三省堂書店との懇談会。松原店長様やご担当の方と、人文会フェア各社の売れ行き状況等楽しく懇談頂きました。終了後に三班に分かれて特約書店様を訪問させて頂きました。本来なら全員でお訪ねするのですが、残念ながら時間の余裕が無いために失礼を致しました。

(A班) 三省堂書店名古屋店、パルコブックセンター

(B班) 近鉄屋野書店、ウニタ書房

(C班) 池下三洋堂、東片端正文館  
翌日は朝早い時間でしたが、トーン様と日販様を見学、名古屋地区の状況をご説明頂きました。今後の発展に期待できる様子に会員社一同安心致しました。十二月の日販様の新社屋完成もうれしいニュースです。

ちくさ正文館書店様では人文書、歴史書の拡販を目的に棚移動をされて、好評を得られているとの事で各社喜んでおり

ます。また外商部様からは大学図書館の蔵書調査のご協力をお約束頂きました。谷口社長様からは積極的なご提案を頂戴いたしましたありがとうございます。

午後からは名古屋大学附属図書館を訪問致しました。貴重なコレクションの数々を拝見する事ができ感激致しました。

名古屋大学生協では東海事業連合のメンバーにご集合頂き、研修会を開きました。常備、新刊案内、消費税問題、出版V A N等の意見交換を行い盛り上がりました。

名古屋市鶴舞中央図書館では見学後の研修会において、中央館と分館との関係、新刊の選書方法等各社の参考になるお話を伺いました。新刊の自動配本については、版元として考慮すべき点が多いように感じました。

丸善名古屋栄店様では棚構成の問題、売行良好書の取扱方法、常備商品や定番商品の商品構成等々、遠慮のない話し合いが行われました。失礼な点もあったか

も知れませんが、お店の発展を願っての事としてお許しください。

名古屋地区は大きな商圏として多くの書店様が活躍されている地域で競争も激しいと聞いておりますが、それぞれに工夫をこらして活躍されています。わが人文会においても特約店九店、準特約店一店と協力関係の深い地域であります。今後也大いに発展される事と期待しておりますので、人文書の販売にご協力頂きます様にお願致します。

今回訪問させて頂いた特約店、準特約店様、取次店、名古屋大学附属図書館、鶴舞中央図書館の皆様には厚く御礼申し上げます。また本誌に、ちくさ正文館書店の古田様、鶴舞中央図書館の加藤様にご執筆いただきました。重ねて御礼申し上げます。

一九九一年 人文会各社受賞図書一覽表 (アイウエオ順)

- ・アジア太平洋賞
- ・浜下武志著『近代中国の国際的契機』(東京大学出版会)
- ・角川源義賞(国文学部門)
- ・鈴木日出男著『古代和歌史論』(東京大学出版会)
- ・カナダ首相出版賞
- ・トルドー著/田中浩訳『連邦主義の思想と構造』(御茶の水書房)
- ・岩崎美紀子著『カナダ現代政治』(東京大学出版会)
- ・慶応義塾賞
- ・久保文明著『ニューデイルとアメリカ民主政』(東京大学出版会)
- ・慶応義塾大学法学部法律学科開設百年記念法学部賞
- ・小林良彰著『公共選択(現代政治学叢書9)』(東京大学出版会)
- ・産経児童出版文化賞
- ・イギリス放送協会編/山中 恒監訳・解説『ぼくの町は戦場だった』(平凡社)
- ・サントリー学芸賞
- ・山室恭子著『中世のなかに生まれた近世』(吉川弘文館)
- ・塩沢由典著『市場の秩序学』(筑摩書房)
- ・造本装幀コンクール賞
- ・鹿野 健編著『リーマン予想』(日本評論社)
- ・大平正芳記念賞
- ・石井 明著『中ソ関係史の研究一九四五—一九五〇』(東京大学出版会)
- ・電気通信普及財団賞(テレコム社会科学学賞)
- ・戸塚秀夫ほか著『日本のソフトウェア産業』(東京大学出版会)
- ・東京海上各務記念財団賞
- ・前田専学著『インド的思考』(春秋社)
- ・新潟日報文化賞
- ・西田美昭・久保安夫編著『西山光一日記一九二五—一九五〇』(東京大学出版会)
- ・日本エッセイスト・クラブ賞
- ・林 望著『イギリスはおいしい』(平凡社)
- ・日本公認会計士協会学術賞
- ・醍醐 聰著『日本の企業会計』(東京大学出版会)
- ・日本農業法学会賞
- ・森 實著『水の法と社会—治水・利水から保水・親水へ』(法政大学出版局)
- ・日本翻訳文化賞
- ・中村 元監修『ジャータカ全集(全十巻)』(春秋社)
- ・日本翻訳出版文化特別賞
- ・永野 藤夫訳『全訳カルミナ・ブラーナ ベネディクトポイエレン歌集』(筑摩書房)
- ・ノーベル文学賞
- ・ナティン・ゴードイマ著/土屋 哲訳『戦士の抱擁』(晶文社)
- ・福武 直賞
- ・直井 優ほか編『現代日本の階層構造(全四巻)』(東京大学出版会)
- ・Bunkamuraドゥマゴ文学賞
- ・山田宏一著『トリュフォー ある映画的人生』(平凡社)
- ・毎日出版文化賞
- ・一色八郎著『著の文化史』(御茶の水書房)
- ・柳田国男賞
- ・根岸謙之助著『医療民俗学論』(雄山閣出版)

# 人文会会員名簿

(〒111 台東区蔵前 2-6-4 筑摩書房内)

1992. 2. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
幹事	青木書店	古川 清	162	新宿区早稲田鶴巻町 538	3202-3999	3204-1187
	大月書店	原田 敦雄	113	文京区本郷 2-11-9	3813-4651	3813-4656
	御茶の水書房	平石 修	113	文京区本郷 5-30-20	5684-0751	5684-0753
	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘 5-38-1	3439-0128	3439-3955
	勁草書房	氏家 富男	112	文京区後楽 2-23-15	3814-6861	3814-6854
	社会思想社	清水 博	113	文京区本郷 3-25-13		
				中銀本郷 3 丁目ビル	3813-8105	3813-9061
幹事	春秋社	澤畑 吉和	101	千代田区外神田 2-18-6	3255-9611	3253-1384
	晶文社	萬洲 隆男	101	千代田区外神田 2-1-12	3255-4501	3255-4506
	誠信書房	濱地 正憲	112	文京区大塚 3-20-6	3946-5666	3945-8880
	創元社	重光 義彦	162	新宿区山吹町 334-11	3269-1051	3269-1092
代表幹事	筑摩書房	菊池 明郎	111	台東区蔵前 2-6-4	5687-2680	5687-2685
	東京大学出版会	竹内 康一	113	文京区本郷 7-3-1		
				東京大学構内	3811-8814	3812-6958
幹事	日本評論社	菅田 誠	170	豊島区南大塚 3-10-10	3987-8621	3987-8590
	福村出版	土屋知可夫	112	文京区小石川 1-3-17	3813-3981	3818-2786
	平凡社	須田 康昭	102	千代田区三番町 5 Kビル	3265-0455	3263-9333
	法政大学出版局	市川 昭夫	102	千代田区富士見 2-17-1		
				法政大学構内	3237-1731	3237-8899
会長	みすず書房	相田 良雄	113	文京区本郷 5-32-21	3814-0131	3818-6435
	"	持谷 寿夫		"	3814-0131	3818-6435
	未来社	西谷 能英	112	文京区小石川 3-7-2	3814-5521	3814-8600
	雄山閣出版	武 一雄	102	千代田区富士見 2-6-9	3262-3231	3262-6938
	有斐閣	辻村 清隆	101	千代田区神田神保町 2-17	3265-6811	3262-8035
	吉川弘文館	阿部 昇	113	文京区本郷 7-2-8	3813-9151	3812-3544

販売企画委員会 ◎重光 ○竹内 古川 氏家 武 阿部  
 弘報委員会 ◎土屋 ○原田 佐久間 西谷 辻村  
 調査・研修委員会 ◎濱地 ○澤畑 渡辺 菅田  
 図書館委員会 ◎萬洲 ○持谷 市川

人間の最奥に潜むエスの正体とは

# エスの本

無意識の探究

グロデック／岸田 秀・山下公子訳  
フロイトは『エス』の概念を著者グ  
ロデックから借用した。 3200円

人にだまされないための心理学

# 影響力の武器

なぜ、人は動かされるのか

チャルディーニ／社会行動研究会訳  
プロの説得技法と消費者心理のから  
くりを具体的に解説。 3400円

誠信書房 東京都文京区大塚3-20-6  
TEL. 03-3946-5666

# 良寛

■吉本隆明

良寛の詩篇・書字などの作品を媒介に、詩人、  
僧侶、隠者の視野から新しい良寛の全体像を  
切り拓いた、『最後の親鸞』につづく吉本・  
良寛像の待望の決定版！ 2000円

# 未来の親鸞

■吉本隆明

『最後の親鸞』から14年、未来まで滅びない  
親鸞の思想を照らしだす問題作。1600円

▶ 定価は消費税込み

東京都千代田区 春秋社 ☎(03)3255-9611  
外神田2-18-6 振替東京8-24661

# 「知の再発見」双書

フランス・ガリマール社と提携  
世界14カ国で出版

① クジラの世界  
宮崎信之監修 伝説と神話の時代か  
らの海の隣人クジラと人間との関わ  
りを図版で描く。フランスで数々の  
出版賞受賞。 1400円(税込)

② 魔女狩り  
池上俊一監修 戦乱・飢饉・ペスト  
による不安の広がるヨーロッパ中世  
で、人々は何を幻視したか。多数の  
図版で解明。 1300円(税込)

創元社 大阪市北区西天満1-4-2  
東京都新宿区山吹町334-11

# スペイン革命—全歴史

バーネット・ポロテン 渡利三郎訳  
新聞や内部文書など夥しい資料に綿密  
な分析を加え、スペイン内戦の隠され  
た真実を描き出す。現代史を書き換え  
た幻の大著、待望の邦訳。 7800円

# スペイン辛口案内

野々山真輝帆 '92オリンピックを目前  
に、スペインはいま？ 麻薬、老人福  
祉、同棲、バスク、カタルニア民族問  
題……浮浪者から政策担当者までの生  
の声をさく最新レポート。 2300円

晶文社 東京都千代田区外神田12-1-12  
電話(3255)4501

# 中国文明史

ヴォルフラム・エーバーハルト 大室幹雄・松平いを予訳  
歴史民族学の泰斗による通史の決定版。46000円

## 第三世界との対決

ガブリエル・コロコ・岡崎維徳訳  
●アメリカ対外戦略の論理と行動 48000円

## 歴史のある文明・歴史のない文明

岡田英弘・樺山紘一・川田順造・山内昌之編  
世界史の構想力をめぐる討論の記録。29000円

オタク国家 ◆ 日本の危機

# 異文化と コミュニケーション

島田裕巳 / 編著

本書は、異文化と衝突する個々の場面を具体的に分析し、その原因を相手の文化の構造や社会関係のあり方を相対化しながらウィットに解明する。それは同時に、日本国家・日本文化の特殊性への透徹した自己分析でもある。

●絶賛発売中 22000円

日本評論社 豊島区南大塚3-10-10 電話 3987-8621 (販売)

筑摩書房 〒111 台東区蔵前2-6-4 電話 03(5687)2680 (価格は税込)

松下圭一

# 政策型思考 と政治

三九一四円

分権化・国際化・文化化が課題となる都市型社会の政治をいかに捉えるか。政治・政策・制度・政府の位置は？市民の可能性は？

# 日本の経済

館 龍一郎

経済社会を冷静にみすえ、官僚主導による成長指向型経済から開かれた市場経済システム確立への転換をうながす。 2266円

東京大学出版会

〈最新刊〉

# A・ハミルトン他著 / 齋藤 真他訳 ザ・フエデラリスト

アメリカ政治思想最大の古典、遂に全訳。黎明期のアメリカ像が明らかになる。A5判 / 定価一五〇〇〇円

野口武彦著

# 江戸の幾何空間

江戸の社会・風俗・文化から現代性を深く読みとる野口氏の筆さばきがあざやか。四六判 / 定価二〇〇〇円

東京・文京 小石川1-3 福村出版 電話 (03) 3813-3981 \*定価は税込\*

# 中世思想原典集成

編訳 監修 上智大学中世思想研究所 (全20巻)

## 17 中世末期の神秘思想

監修 小山宙丸 待望の大型企画第一回配本。十四・十五世紀の英国、ネーデルランド、フランス、ドイツに開花した神秘思想の精華十五著作を収録。全篇本邦初訳。「中世の秋」の核心へ。 ●定価4,800円(税込)

平凡社 〒102 東京都千代田区三番町5  
振替・東京8-29639 ☎03-3265-0455

## 書物から読書へ

シャルチエ編 読むことのプラチックをめぐる新しい文化史の試み。ダントンプルデュ他。水林・泉・露崎訳 予定四四四円

## シモーヌ・ヴェーユカイエ 4

時代に抗し、34歳で逝った稀有の魂が運命と書き記した手帳。その思索の全貌をここに公開。全4巻。電原真白訳 予定六六〇円

## ウルフの部屋

宮田恭子 非在の母・後期印象派・狂気、この三つの鍵を中心、ウルフの抱え難い文学的人生の全体像に迫る。六六四円

## 周仏海日記 二巻一・二巻

森徳益編 日中戦争のさなか狂精衛と共に親日政権を組織した周仏海の日記。極東現代史の内幕。村田忠禧他訳 五〇四〇円

東京文京本郷  
3丁目17-15

みすず書房

## 法政大学出版局

# N・M・ペンザー・・・岩永博訳 トプカプ宮殿の 光と影

四九四頁／三九一四円

シルクロードの終着駅イスタンブルに、今なお往時の美をとどめるトプカプ宮殿。その謎にみちた組織・制度を、ハレムにおけるスルタン妃や側室の演じた役割等を軸に解明する

点 53  
版 8  
口 8  
絵 8

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1  
☎03-3237-1731 振替・東京6-95814

# マルクス事典

トカーヴァー著 村上隆夫訳 定価2266円

マルクスの社会理論を学ぶのに必要な主要概念とさまざまな用語をわかりやすく解きほぐしマルクスの思想を正しく把握なおす

未来社

東京都文京区小石川3-7-2  
電話(03)3814-5521 〒112

# ヘーゲル用語事典

岩佐茂・島崎隆・高田純編 定価2884円

価格は税込

江戸時代三百年の歴史のすべてを  
各巻900点の史料図版で再現した  
一大百科絵典

ヴィジュアル百科

# 江戸事情

全6巻

NHKデータ情報部編 監修=樋口清之

◆第1回配本中 **1生活編**

石川松太郎他 定価 各3800円

●全巻の内容●

- 1生活編 石川松太郎他 2産  
業編 遠藤元男 3政治社会編  
大石慎三郎 4文化編 芳賀登  
5建築編 平井聖 6服飾編  
丹野郁・北村哲郎

雄山閣 \*価格は税込みです。

千代田区富士見2/振替東京3-1685

林 直道◎著

# 日本歴史推理紀行

¥2000・税別

歴史の不思議・謎に大胆な推理で挑戦。人間  
の織りなすドラマは感動的で面白い。

渡辺 治◎著

# 企業支配と国家

¥2000・税別

独特な競争原理をともなった現代日本の権威  
的秩序を鋭角的かつ従横に分析した問題作!

青木書店

東京都新宿区早稲田鶴巻町538 03-3202-3999

# 江戸の食文化

江戸遺跡研究会編

A5判/定価五三〇〇円

発掘遺物「タイムカプセルに残された江戸の食生活」と  
文献史学、美術史学、民俗学「伝えられてきた江戸の  
食生活」の双方から、江戸の食文化の全体像に迫る。

# 日韓併合

森山茂徳著

日本歴史叢書47  
定価二六〇〇円

日本の侵略過程からだけでなく、当時の両国を取り巻く  
国際環境からも検討し、広い視野から事実を究明。四六判

吉川弘文館

東京文京区本郷7-2-8・電話03-3813-9151

「ドキュメント」

好評発売中

# 真珠湾の日

佐々木陸爾/木畑洋一/高嶋伸編  
欣/深澤安博/山崎元/山田朗編

一九四一年一月八日を中心に、人々はどう行動し  
何を考えたかを資料・写真によって再現。政治家の  
言動から庶民の生活記録にいたるまで広く世界各地  
から資料を徹底収集。なぜ世界戦争を阻止できなか  
ったかを深く問う。A4判変型・5800円(税込)

大月書店

東京都文京区本郷2-11-9  
電話03(3813)4651<代表>

非  
売  
品

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印